

No.4 岡崎 乾二郎 —無題—

Kenjiro Okazaki

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成 10) 年 11 月 15 日付 立川市市報記事より

岡崎乾二郎さんは、高島屋わきの6つの換気口を覆う全長27mの作品をつくった。船の構造のような形は、直方体をねじってそれを切断して生まれたもので、コンピューターを使って設計された。中には作家が選んだ果樹が植えられており、鳥たちだけが網の目を通して中の果実をついばむことができる「鳥かご」である。

この作品を含め、西側の都市軸側に面している作品には大きなものが多いが、それは将来都市軸沿いに開通が予定されているモノレールからの視線を意識し、都市の顔となるランドマーク的な作品となるように意図したからだった。ファーレ立川がオープンした当時、レールを支える柱だけが林立していたそのモノレールの一部が、11月27日には開通となる。4年を経て、アーティストたちの意図は果たされるわけである。 ※記事掲載当時の状況です。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

1—

それぞれ独立した4つの部分からなる立体群は、遠くから眺めるとなだらかなひとつの稜線の丘陵のように見えるだろう。けれどももっと直截に言えば、ゆるやかな丸みを帯びたこの三角の形状は、丘というよりも、むしろその丘の上に建てられたギリシャ神殿のペディメント(破風)の構成を踏襲している(それもミュンヘンのグリプトテークにある後期アルカイック期のアフエイア神殿のペディメントに)。

4つの部分は、もともとは同じひとつの基本形を元にし、それが横倒しにされ、交差され、切断されたりしながら反復して得られた形—ギリシャの戦士のように横たわり、あるいは上体をひねるようにして起き上がる—であり、そもそもその基本形はといえば、ひとつの形で雌型と雄型を兼ね合わせたもの(つまり二つ同じこの形態があれば、その二つぴったりと合う)、いわばアンドロギュヌスな形態—女神でありながら戦士でもあるように—である。

もっと詳しく述べれば、この基本形は、すでにここには残存しない複数の形態—複数(8つ)の途切れ途切れに残された断片的な、ときにネガポジが逆転した曲線どうしの間を想像的な面(2本のうねるような力線)で覆ってみることで、はじめて想定することができる形態—の狭間、つまり実際は存在しない想像された面の間に流し込まれ得られた形が、この基本形である。

この基本形と基本形の間が実在化され、3本のうねる力とそれを唐突に遮る幾つかの切断面(ひとつは道路側の垂直な切断)によって複数に分裂させられた形態群が、最終的に、この丘陵—ペディメントを形成しているという次第である。

2—

丘陵、あるいは巨大な神々の身体の断片、あるいはヨナを呑みこんだクジラ、あるいは象を呑みこんだウワバミのようにも見える、この彫刻の表面は粗い格子で覆われている。

その格子の内部には、色あさやかな果実を実らす木々が植えられる。

ところどころ、この格子を突き抜けて伸びる黄色い大きな実をつける木は夏蜜柑だ。この果実を手にするのができるのは格子に遮られる人間ではない。

けれど小鳥たちはおよそ8センチ大の格子の隙間を自在にくぐりぬけ、そこで自由に果実をついばむことができる(人間に邪魔されることもなく)。これは小鳥たちの自由を奪うケージではなく、反対に小鳥たちだけの自由を与えるケージであった。

3—

この彫刻は人間たちのためではない空間を内部に抱えている(神殿という神殿のほとんどが、その内部へ人間の侵入を禁じていたように)。

そして、ここはあからさまにアルカディアあるいはエデンのような楽園になぞらえられているように見えるかも知れない。— むろん神殿において、人間はそこには入れないという条件は、逆に人間たちの視線を終わりなく引きつけつづけるための仕掛けだったし、同じくパラダイスというパラダイスは、決して人がそこに到達できないゆえに、パラダイスでありつづけたのだが—。

けれど、そうはいつでもこの彫刻をアルカディアのような楽園になぞらえるのは適当ではない。むしろヨナ(ピノキオ?)を呑みこんだクジラや、あるいは象を呑みこんだウワバミとして見る方が、この彫刻にはよりいっそうふさわしいだろう。

理由は簡単である。

こんな話を思い浮かべてほしい—あらゆるものを呑みこむことができるウワバミでも唯一、呑みこむことができないものがある。それは他ならぬウワバミ自身である。ピノキオを呑みこんだクジラも、その彼の胃の中でピノキオたちが食べようとする御馳走は食べることはできなかった。

—こんな話同様、どうしても人が入ることができない場所があるとしたら、それは彼自身の体の内側に他ならない。(または自分の頭の中身を自分で覗いて見ることはできない)。つまり、われわれこそがウワバミであり、ピノキオを呑みこんだクジラであったというわけである。

4—

この彫刻は、デパートの地下空間の排気口に位置する。機能的に言えば、この彫刻は丘陵のように変形された排気塔そのものである。いわば、ここは都市空間のもっとも中枢の内部空間が外部に向けて呼吸する場所である(風はこの丘から外に向かって吹く)。

都市空間のもっとも内側にある場所を、もっともそこから遠い外側の場所へ位置づけなおすこと一作者が、この彫刻にもとめた課題は端的にこのようなものだった。

以上のいささか過剰な説明は、いかにその課題を解いたか、その解答例である。

象を呑みこんだウワバミか帽子にしか見えない、という想像力の欠如もときにはいい。

じっさい机の上の帽子を眺めているときの、ふと、この帽子のなかに巨大な象やクジラあるいは神々を入れるここの彫刻ははじまったのだから。

もちろん、帽子の中に本当に入れられるものは、私たちの頭だということは決まっているが。